

第十一章 土地の地代——その性質と形成（九）

過去四世紀における銀価の変動に関する補論

改良の進展は三種の粗生産物に異なる影響を与える

粗生産物は三つに大別できる。第一は人為の努力ではほとんど増やせないもの、第二は需要に応じて増産できるもの、第三は産業の効果が限られるか成果が不確かなものだ。富と改良が進むほど、第一の実質価格は上限なく高騰し得る。第二は大きく値上がりする場合があっても、長期に超え続けられない一定の上限がある。第三は原則上昇方向だが、同じ改良段階でも増産努力の成否を左右する偶発要因により、値下がり・横ばい・小幅から大幅の上昇までが起こり得る。

第一類

第一類の粗生産物は、人の産業努力ではほとんど増やせない品である。自然が限られた量しか生まず、傷みやすく、季節をまたいで蓄蔵して一度に市場へ出すこともできな

い。珍鳥・希少魚・各種の獵獸・野鳥の大半、なかでも渡り鳥がこれに当たる。富と贅沢が広がれば需要は増すが、供給は需要増の前後で大差なく、数量がほぼ変わらないまま買ひ手の競争だけが強まるため、価格は上限なく高騰し得る。たとえば木シギが流行して一羽二十ギニーで売れようと、人為の努力で市場供給を大きく増やすことはできない。ローマ最盛期に珍鳥や珍魚へ法外な高値が払われたのも、銀が安かったからではなく、任意に増やせない希少品の価値が極めて高かったからである。共和政崩壊の前後、ローマの銀の実質価値は現代欧州の多くより高かった。シチリアの十分の一税小麦はモディウス（ペック）一盛につき三セステルティウス（約六ペンス）で引き取られたが、これは税としての低めの公定で、市場平均より安かったとみられる。十分の一超過分の追加調達はベック当たり四セステルティウス（約八ペンス）と定められ、当時の適正な契約相場（一クォーター約二十一シリング）と考えられていた。他方、近年の凶作前のイングランド小麦の通常契約価格は一クォーター二十八シリングで、品質はシチリア産より劣り、欧州市場でも一般に安い。したがって、古代の銀価は現代に対し逆比で三対四、すなわち古代の銀三オンスが今の四オンスと同じ労働や商品の購買力を持っていたと推定される。プリニウスによれば、セイウスは皇后アグリッピナへの献上品として白

3 第十一章 土地の地代——その性質と形成（九）

いナイチンゲールを六千セステルティウス（今の貨幣価値で約五十ポンド）で、アシニウス・ケレルはサーモレット（赤ホウボウ）を八千セステルティウス（同約六十六ポンド十三シリング四ペンス）で購入した。もともと、当時の実質価格は名目より約三分の一高かったため、これらの額は実際の重みより小さく見える。実質に換算すれば、前者は今の六十六ポンド十三シリング四ペンス、後者は八十八ポンド九ペンス半に相当する労働・生計の購入力となる。かかる高値の真因は銀の潤沢さではなく、当時のローマ人が自家の必要を超えて自由に投じ得た労働と生計資源の豊富さにあり、同じ労働・生計を動員するのに要する銀の量は、むしろ現代より少なかったのである。